

自動小銃は社会を 無秩序化するのか

— 東アフリカ牧畜民の民族間関係を事例に —

佐川 徹

1. 東アフリカ牧畜社会の小型武器問題

近年、アフリカ各地で非合法小型武器の拡散とそれを利用した暴力行為の発生が大きな政治問題となっている。家畜の争奪などをめぐり民族間に暴力的紛争が頻発してきた東アフリカ牧畜社会に関しても、1970年代末から自動小銃が拡散したことで紛争の頻度と強度が増し、死傷者数も増大しているという報告が数多くなされている。

いくつかの研究では、自動小銃の流入が牧畜社会へ与えた影響を検討している。Abbink[2000]はエチオピア西南部のスリ社会において、自動小銃を手にした若者が年長者の権威に従わなくなり、また近隣民族との戦いでも従来の「戦争のルール」が破られつつあると指摘し、自動小銃が流入したことでかつての儀礼化された暴力が剥き出しの物理的暴力に変質していると分析する。またウガンダのカリモジョンなどを対象としたGray et al.[2003]は、かつては他民族への家畜レイディング(略奪攻撃)が不確実な環境への適応戦略

として有効なものだったが、自動小銃を用いた近年のレイディングは、長期的に牧畜という生業形態そのものを破滅させていくものだと主張する。

しかし彼らの議論は、自動小銃の有する暴力性それ自体が既存の秩序を破壊するような技術決定論的な分析がなされている点で、問題が残る。自動小銃の殺傷能力が、それ以前の武器に比べて強力なことは事実だとしても、人びとがその暴力性に屈服して社会が無秩序化しつつあると示唆する結論は早急に過ぎよう。本論では、筆者が2001年以来調査を行っているダサネッチと近隣民族との関係が、自動小銃の拡散後にどのように推移してきたのかを述べて、人びとが新たな暴力技術の流入に対して取ってきた自発的対応を示そう。

2. 銃の流入と拡散の歴史

ダサネッチは、エチオピア、ケニア、スーダンの三国国境付近に暮らす人口約3万7000人の農牧民である(図1)。彼らは、隣接するトゥルカナ、

ニャンガトム、ハマル、ガブラと長年にわたって戦いをくり返してきた。近年まで政府は紛争に適切な介入をせず、むしろ民族間関係を悪化させる負の影響を与えてきた。

2006年現在、ダサネッチの成人男性の48%が銃を所有しており、そのうちの87%は自動小銃である(筆者調べ。調査対象は163人)。彼らは、もともと戦いに槍や弓矢を利用していたが、19世紀末のエチオピア帝国軍による軍事征服を契機に、北部からの商人などが持ち込んだロチグラ(ochigura)という銃を民族間の戦いに用いるようになった。

銃の利用は、エチオピアがイタリア占領下に置かれた1936～41年以降さらに広がる。占領期、イタリア軍はダサネッチを国境防衛部隊として訓練するとともに大量の銃と弾丸を与えた。イタリア軍の撤退後は、彼らが残っていた銃が商人などの手をとおして拡散した。この時期に流通していた銃は、モーゼル社製のライフル銃などであっ

図1 ダサネッチ周辺の地図



ダサネッチ: 民族名 オモラテ: 都市名 -----: 国境
(出所) 筆者作成。

たと推測できる(増田[2001])。

ダサネッチが、カラシニコフ銃に代表される自動小銃を入手し始めたのは、1980年代終わりからである。当初は1丁を去勢成牛9～12頭程度と交換していたが、1991年にエチオピアのデルグ政権が崩壊し、それにともない多くの武器が民間に流出したことで交換率は下落した。2006年現在では、去勢成牛2頭程度で交換できる。

その一方で、近年になってカラシニコフ銃の弾丸の供給量は減少し、その交換率は上昇している。1997年ごろはメス子牛1頭で225発入手できたが、2006年には100発のみとなっている。

3. 自動小銃拡散後の民族間関係

では、自動小銃の拡散がダサネッチと近隣民族の関係に与えた影響を、三つの民族との関係を例にみていこう。

(1) ニャンガトムとの関係

まず北西に隣接するニャンガトムとは、1960年代までほぼ友好的な関係を維持していたが、1970年代に入ると戦いをくり返し、ダサネッチが優位に戦局をすすめた。しかし、1980年代半ばに事態は一変する。なぜならニャンガトムが、スーダンに暮らし親しい関係を有するトボサなどとおして、この地域で最初に自動小銃を入手したからである。これらの銃は、おもに1979年のウガンダでのアミン政権崩壊や1983年のスーダンでの第二次内戦勃発を契機に拡散したものである。ニャンガトムは、自動小銃を持たない近隣民族への一方的な攻撃をくり返した(Tornay [1993])。

ダサネッチも1988～89年に3度の攻撃を受け、オモ川西岸の三つの集落が全滅させられた。とく

に被害が大きかったのが、1989年の「サーライン村[†]の戦い」である。この戦いでニャンガトムは、夜明け前に照明弾を放ち周囲を明るくすると、数時間にわたり自動小銃を撃ち続けて、村に暮らす数百人のダサネッチを殺害した。

この戦いの際には、すでに死亡したダサネッチの体に弾を打ち続け、弾がなくなってもほかの成員から止められるまで引き金を引き続けたニャンガトムの姿が目撃されている。またダサネッチを全滅させたニャンガトムは、近くの小高い丘へ移動すると、略奪した家畜を殺してその肉を食べ、銃を空に向けて打ち鳴らした。一般にこの地域の戦いでは、敵を殺してその家畜を奪ったら、追撃を恐れてすぐに引き揚げる。しかしこのときニャンガトムは、自らの圧倒的な武力を誇示するかのようふるまいをしたのである。これらを目撃したダサネッチは、当時のニャンガトムが「カラシニコフに酔っていた(*klasi faani*)」と述べる。多くのダサネッチはこの一方的な攻撃をおそれて、オモ川西岸の居住地を放棄して東岸に避難した。

ダサネッチはニャンガトムに対抗するための自動小銃を政府に求めたが、十分な量は与えられなかった。つぎに、ダサネッチの東部に暮らし、彼らが友好的な関係を保つホールの地で自動小銃が購入できるという情報を得て、交換財としての家畜を連れてその地へ向かった。ダサネッチは、1970年代初めまで、彼らの居住地域から200キロメートルほど北に位置する町マジを拠点に活動する高地人商人から銃を入手していたが、ニャンガトムとの関係悪化などで往来が困難になり、1980年代以降はホール方面からの入手がおもとなっ

た。先述したように交換率は高かったが、人びとは「このままでは家畜はニャンガトムのものになるだけだ」と語り合って、次々とホールの地へ向かった。

多くの男性が自動小銃を購入した1991年ごろに、ダサネッチはニャンガトムの中心地の一つであるキビッシュ周辺に大規模な攻撃を加えた。「ロベレ村の戦い」と呼ばれるこの戦いで、ダサネッチは十分な戦果を挙げることはできなかったが、この攻撃によって自らがニャンガトムから一方的に攻撃される存在ではなく、少なくとも対等に戦える能力があることを証明した。

実際、戦いが終わると多くの青年が自動小銃を手にもオモ川西岸での生活を再開し、それ以降2006年にいたるまで両者のあいだに大規模な戦いは起きていない。むしろ、ダサネッチが1980年代以前から利用していたキビッシュ周辺の放牧地へと移動を進める過程で、両者はかつての友好的な相互往来も回復している。この背景には、勢力均衡を認識した双方の成員に過剰な暴力への忌避感が広がったことがあると推測できる。

(2) トウルカナとの関係

つぎに、ケニア国境を挟んで南西に隣接するトウルカナとの関係を検討しよう。トウルカナとは、1世紀以上にわたって断続的に抗争を重ね、とくに1980年代から今日にいたるまで戦いが頻発している。しかし、2000年ごろの「アイイシュオモイの戦い」を契機に、戦いの様子が変化しつつある。

この戦いは、過去10年間に起きた戦いのなかでもっとも大規模なものの一つであり、ダサネッチがトウルカナの暮らすカナマグロ村を攻撃し、双方で200人近くの死傷者を出した。このときダサネッチは、夜明け前に中央隊と左右の側面隊に

† 1 サーライン村は、ダサネッチの行政中心地であるオモラテの町から15キロメートルほど南西に位置する村である。

分かれて集落内部へ一斉に攻め入った。これは、彼らのオーソドックスな攻撃パターンであった。しかしこの戦いの際には、暗闇のなかを大量の銃弾が飛び交ったため、略奪すべき家畜を殺してしまっただけでなく、左右から集落に攻め入ったダサネッチ同士が狙撃し合う事態も発生した。

ダサネッチがダサネッチを殺すことは、彼らがもっとも忌避すべきだと考えていることである。そこにはニョギッチ (*nyogich*) という概念が関係している。ダサネッチを殺害したダサネッチはすべて「ニョギッチを持ち」、その人物はいずれ「腹がふくれてそれが地にこぼれ落ちる」ことで必ず死んでしまう。

この戦いの結果を受けて、ダサネッチはこのまま自動小銃で同じように戦いを続けると、「ニョギッチを持つ」人びとが増える可能性が高まる、と考え始めた。そこで戦闘に参加した若者はインフォーマルな会合の場で話し合いを重ね、また年長者も彼らにアドバイスをした。その結果、夜明け前に集落内部に攻撃を仕掛けることをやめ、夜が明けて敵の家畜が放牧に向かうために集落の外へ出てきたところを攻撃する戦略を採用することにした。そうすればダサネッチとトゥルカナは平行して対峙することになり、仲間同士が狙撃し合うことはないからである。実際、「アイイシュオモイの戦い」以降に起きた戦いは、筆者の知るかぎりすべて集落の外での戦いである。

(3) ガブラとの関係

最後に南東に隣接するガブラとの関係について述べよう。ガブラと接触があるのは、おもにケニア側の町イレレットの周辺に暮らす数千人のダサネッチである。両者は、英国植民地時代から多くの戦いを重ね、1990年代に入ってから戦いが頻発していた。その結末が1997年の「コイ村

の戦い」であった。これは、ダサネッチがガブラの集落を攻撃して、数時間で100人以上のガブラを一方向的に殺害した悲惨な戦いであった。

この戦いを受けて、ケニアの地方政府は本格的に両者の戦いを抑止する必要性を認識した。そして相互の成員を殺害した場合、50頭の牛を相手民族に支払うという罰則制度を設け、1999年ごろにある男性がひとりのガブラを殺害したときには執行した。

これが一定の抑止効果を発揮し、「コイ村の戦い」以後両者のあいだに大規模な戦いは起きず、ニャンガトムとの関係同様、友好的な相互往来も回復している。しかし、戦いが起きる契機は潜在的に存在し続けている。たとえば2006年1月には、まだ戦いに行かなかったが、結成されたばかりの若い年齢組の成員がガブラへの大規模な攻撃を計画した。しかし、事前にこれを察知したすべての年長の年齢組成員たちがこれを強制的に阻止したため、襲撃は未遂に終わった。

ダサネッチ社会は世代組織と年齢組織によって分節化されており、一般的に年長者が若者に対して強い権威をもつ。しかし、世代組/年齢組間には錯綜した対立と共同の関係があり、すべての組が結束して最年少の組の行動を管理することはきわめてまれである。

ケニア側に暮らすダサネッチは、ケニア政府は常に多数派のガブラへの優遇政策を採用してきたと感じており、「コイ村の戦い」のあとにも政府軍が押し寄せダサネッチを攻撃したとされる。上記の事例で年長の成員たちは、「コイ村の戦い」以降に介入を強めつつあった政府からのより抑圧的な介入を防ぐために、従来の社会組織原理より以上に若者への管理を強化することで、最年少の組によるガブラ攻撃計画を事前に抑止したのだと推測できる。

おわりに

自動小銃の拡散後、ダサネッチと三つの民族のあいだにはそれぞれ大規模な戦いが発生し、多くの死傷者を出した^{†2}。しかし、それが民族間関係を無秩序化したわけではない。

冒頭に触れた先行研究と本論の主張は異なるが、そこには二つの理由があると推測できる。一つは調査時期のちがいである。Abbink[2000]によるスリの研究は自動小銃が流入してまもない時期を扱っており、その時期には本論の対象地域でも「カラシニコフに酔っている」という、人びとが暴力にとりつかれたかのような状況がみられた。しかしその後20年のあいだに、人びとは大規模な戦いでの経験から、自動小銃を用いた戦いと其の帰結が既存の社会のあり方を大きく変容させかねないと感じ取り、秩序を維持するための新たな対応を取ってきたのである。

もう一つは外部介入の度合いのちがいである。Gray et al.[2003]が対象としたカリモジョンは、ウガンダ政府から強制的な武装解除介入を複数回にわたって受け、それが地域により一層の混乱を招いてきたことが指摘されている(Mkutu[2008])。それに対して本論の対象地域では、政府が最小限の介入しか行わなかったことで、勢力均衡の認識による暴力の回避、戦略の転換、社会内部での若者管理の強化という人びとの自発的対応が効果を発揮することが可能になったと考えられる。

もちろんこれらの対応を取ったからといって、戦いを招く背景要因は存在し続けている。実際、小規模な襲撃は2006年現在でも発生している。また、この対応自体が社会内部に新たな亀裂を招

く可能性もある。たとえば、ケニア側でのガブラとの関係をめぐっては、今後若者と年長者の対立が先鋭化していくかもしれない。その意味で、人びとがつくりだしている秩序は、大規模な暴力的紛争が勃発する危険や社会が分裂していくおそれと隣り合わせの不安定なものである。

2000年代に入って、この地域の紛争にも外部アクターが介入を本格化しつつあるが(佐川[2007])、2006年時点では武装解除に着手していない。今後の介入が、民族間の対立をより非暴力的なものとしていくことができるのか否かは、現時点では未知数である。

【参考文献】

- 佐川徹 [2007] 「北東アフリカ紛争多発地域の平和構築に向けて 外部介入による牧畜民間の平和会合」(『アフリカ研究』71) pp.41-50。
- 増田研 [2001] 「武装する周辺 エチオピア南部における銃・国民・民族間関係」(『民族学研究』65(4)) pp.313-340。
- Abbink, J. [2000] "Restoring the Balance: Violence and Culture among Suri of Southern Ethiopia," in A. Goran and J. Abbink eds., *Meanings of Violence*, Oxford: Berg, pp.77-100.
- Gray, S., M. Sundal, B. Wiebusch, M.A. Little, P.W. Leslie and I.L. Pike [2003] "Cattle Raiding, Cultural Survival and Adaptability of East African Pastoralists," *Current Anthropology*, 44, Supplement, pp.3-30.
- Mkutu, K.A. [2008] *Guns and Governance in the Rift Valley: Pastoralist Conflict and Small Arms*, Oxford: James Currey.
- Tornay, S. [1993] "More Chances on the Fringe of the State? The Growing Power of the Nyangatom," in T. Tvedt ed., *Conflict in the Horn of Africa*, Uppsala: Uppsala University, pp.143-163.

(さがわ・とおる /
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

†2 自動小銃の拡散後、ハマルとのあいだには大規模な戦いは起きていない。